

# 「経 験」

村 田 修 子

今から二年ほど前に、「経験」という題の歌をうたって大ヒットをとばした歌手がいましたが、教育関係の本や話などではよく見たり聞いたりすることばが題になっていることは珍らしい感じでした。それがその年の大賞を受けたということは、うたった人の技術的なものが抜群であったことはいうまでもないことだと思いますが、それにも増してその歌詩の内容が全くその人が今迄に実際経験した事柄をテーマにしたものなのだそうです。ですからその気分というものは十二分に分っているわけで、それに音楽的なテクニクを加味させながら歌い込んでいたので、聞いた人をしびれさすようなムードが生れてきて、多くの人達を感じさせたのだらうと想像されます。

子どもに關した話の内容としては、最近よくこのことばを耳にします。

私がこのことばを新しく、また感心しながら聞いたのは

女高師の学生時代の倉橋先生の「保育」のお講義でした。

自分たちの専門でない授業は合併授業で他科の人たちといっしょになって多人数でしたから、うしろの席で聞いて、今考えと申しわけないはなしなのですが他のことをしながら受けることが多かったのですが、倉橋先生の授業は各科とも、みんな先を争って前の方の席へ行きました。

それでも専門が違いますので、保育界における先生の偉大さ、というものを知つてのことではなかつたのですから、これも全く「あの時間は何かある」という学生自身の経験によつて、そうした行動をとつたことは間違いないのです。

それほど先生のお講義はすばらしく、引きつけられる何物かがありました。

「ここに一軒の白壁びんの土蔵の家があります。その壁はまっ白で何も書かれたりなどしていません。その白い壁に向

っている、子どもは壁がこう言っているように思えるのです。「ヤーイ、書けないだろう」そこで子どもは「なに、書けるんだから」そこで前に立ちただかっている白い壁をやっつけてやろうとしてそこに書くのです。壁が白ければ白いほど威圧されているように思うのです」倉橋先生の授業の様子を思い浮べますとこの話がまっ先に思い出されます。

大切なことを含ませながら、そしておもしろく、聞く者を夢中にさせます。余りおもしろいので書く手を休め聞き入ってしまいます。そうすると、その時間のたつのがとても早くてすぐ終りのベルがなります。ハッとして「何からこういうお話になったのだったかしら」と考えているうちに、先生はサッと本筋の話にかえられてまとめをなさるのです。その手際よさは目を見張るばかりで、「ああそうだった。このお話からああなっていたんだ」と毎回思ったものでした。

戦後幼稚園が再開されてすぐでしたが、週一回ずつ、「新教育」について計六十五時間の講義を持たれたことがあります。新憲法による解釈の仕方、新教育での大切な柱のことなど、分り易く解説されながらお話は進みまし

た。その中の一つに「経験させることの大切さ」について伺いました。

この項目の大切なことはお話を伺えば分りますし、字で書かれているものを読んでも分ります。そして分ったつもりになれるのです。けれども自分がやってみて「はじめてあれは分っていたつもりだっただけなのだ」ということが改めて分るのです。お話は伺ったことによって、経験することの大切さの認識の裏付けをして頂いたように思いました。

いま目の前にいる一歳半の孫が、新しいものを不思議そうにじつとみつめたり、同じようにやってみようと息はずませているときの目の輝きの美しさや、どうして覚えるのか、止められたことはかくれるようにしていたずらをした、大人の心持ちや行動を期待していることが分る心の動きを見せてくれるなどの、私がもう忘れてしまっていた幼い時期の新鮮さを、再び経験させてもらって、その大切さを感じていまです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)